

# イギリス水禽協会巡り(1)

内 田 映

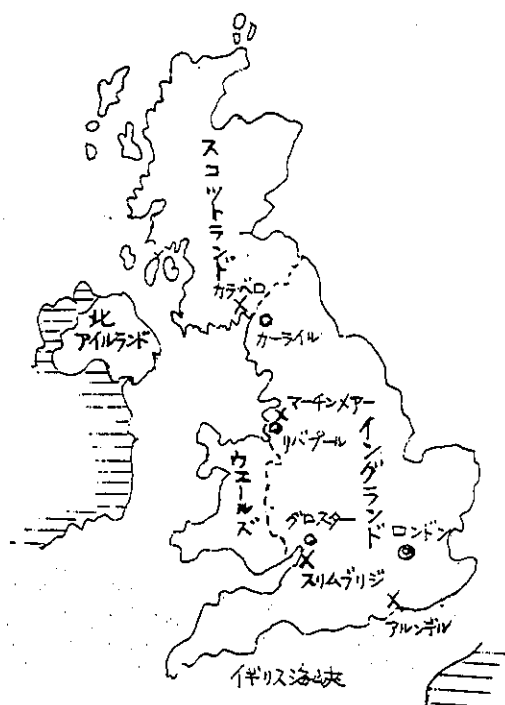
## —スリムブリッジ—

英国での水禽類研究で著名なスリムブリッジについて、はっきりと記憶に残っているのは、昭和48年6月日本白鳥の会設立総会の時であった。その後、Swans of the world (1974)を求めて、その中に断片的に出て来るSlimbridgeの記述で、白鳥研究のスリムブリッジとして、何時しか脳裏に深く刻まれていった。

そして昨年(1979)の1月下旬、札幌の日本白鳥の会副会長松井繁氏より電話が来て、年末年始を利用してスリムブリッジへ行って来たが、もう一度、今度は白鳥の会のメンバーで行きたいがという連絡を受けた。私は即座に賛意を表した。次いで2月2日着の郵便で、The wild Swans at SlimbridgeとThe wildfowl Trustとの二種の印刷物をいただいた。前者は、このイギリス水禽協会設立者のサー・ピーター・スコット夫妻の著で、文はスコット卿、沢山の写真は夫人撮影という12頁の薄いものだったが、スリムブリッジでの白鳥渡来の実態と研究を色々知ることが出来て、大変参考になるものであった。特に興味を覚えたのは、ここスリムブリッジも600羽近いコハクチョウが渡来して、オオハクチョウは僅かに数羽乃至10数羽が時々訪れるに過ぎないこと、そしてコハクチョウの学名も日本渡来と同種のCygnus columbianus (C. bewickiiではなく)が使用されていることだった。また2頁にわたって40羽のコハクチョウの正面、両側面、下面の嘴が原色で描かれて、T-ANGO, DARBY, ANTONY, CLEOPATRAな

どと全部に名前がつけられていた。

この絵は、1,073羽につけられたもののほんの一部であるとは恐れ入った。ということは、コハクチョウの嘴のパターンは、千差万別で変異の多いことを物語っているのである。もう一つ



後者の印刷物は、イギリス本島西側海岸沿のスリムブリッジ(本部)、マーチンメアー、カエラベロック、東側海岸地帯のワシントン、ウェルネイ、ピーカークの6箇所の水禽協会の概要案内であった。但しその後イギリス海峡に近い南部にアランデルが、もう一つ増えた。

以上のようなことからスリムブリッジについての実情が分るとともに、いよいよイギリスに渡来しているハクチョウ類特にコハクチョウについて実地見学研究に意欲が燃え上るとともに、松井副会長に感謝し、渡英までには未だ1年近い先のことだったが、イギリスの鳥類の事前調

べにとりかかるようになった。幸にして、以前の東南アジアやオーストラリアの場合と違って、既にイギリス関係の鳥類洋書も14冊程持っていたので、直ぐ役立つという条件に恵まれていたのは好都合であった。それとともに高額な金を使って地球の反対側の遠い国へ行くことだったので、英国そのものも手持の本や書店で眼についたものを買ったりして、少しは勉強をしておくことにした。かくて英国行の夢は膨み続けて行った。

### —シベリアの空を飛ぶ—

いよいよイギリス外遊へ、水禽協会のスリムブリッジ、マーチンメアー、カラベロックの西海岸3箇所を視察する目的で、日本白鳥の会のメンバーと羽田空港を離陸したのは、昨年12月26日午後1時半で、モスクー経由一路11,000キロのロンドンへとアエロフロート・ソ連航空で飛び立った。モスクーへは8,000キロ、それよりロンドンまでは、更に3,000キロである。

本州の雲に包れた山々も、またたく間に過ぎて、日本海上も太陽の燦々と輝く雲上を高度10,000メートル、時速855キロの予定で、ロンドンへ向ったが、いささかの揺れもなく快調な飛行振り。機内放送もソ連シュアードスが、初め露語、次いで英語、最後に日本語と三段構え。午後3時15分の放送では、目下ハバロフスクの上空を飛行中、高度10,000メートル、時速850キロ、モスクー到着は午後6時15分（モスクー時間。日本時間では翌日の0時15分）の予定。既にシベリアに入っていた。下界は白皚々の世界、山嶺の山腹で黒ずんで見えるのは針葉樹林地帯だろう。機内の温度は28°、暑いので上衣をぬいで、氷雪の世界を下瞰し続ける。午後4時45分（日本時間）、真赤な夕陽が地平線に沈む。壮麗なシベリアの入陽であ

る。急に機内に軽いドヨメキで、反対側の窓を見ると、今しも真赤な月が上ったところで茜色の帯も美しい。“西夕陽東夕月枯野哉”と大町桂月が満洲の野を吟じた俳句を思い出した。また同行の仙台での雁の研究家横田医師の話だと“菜の花や月は東に陽は西に”という蕪村の句もあると話された。

午後5時20分、僅かの小電球を残して消燈となった。暗いので眼をつぶってみても、とても眠れたものではないので、窓外を眺めていると、地平線までは真暗で、その上がほの明るく、その上は暗青色、星一つも見えない。そろそろモスクーへの空、半分位は来たのではなかろうか。真暗な地平線の空にオレンジ色の色帯が現れたが、そのうちに消え、地平線近くの空は濃紺色影となる。9時10分頃、行手の左方下界の山嶺から雪原にかけて淡い色どりで、ぼーと明るくなる。オーロラ、オーロラと口々にささやかれて、一瞬どよめきが起った。外景は相変わらず真暗で、地平線も見えず、星もなかった。

### —モスクーからロンドン—

午後9時半、機内放送で、現在高度10,000メートル、時速850キロ、何とか州上空を通過中、モスクー到着は午後6時30分（日本時間0時30分）の予定とあった。この時から私は時計を6時間遅らせてモスクー時間とした。やがてモスクー時間の午後6時20分（日本時間0時20分）、長いシベリアを経て、東京から約11時間かかって、やっとヨーロッパに入り、モスクーに着いた。

さっきの機内放送では、モスクーは零下20度ということだったので、給油のため一時、空港内バスで待合室まで行く時の外気は、流石に頬にその冷たさを感じた。待合室に入ると売店があったので、友田安雄学兄の誘いでのをぞいてみたら切手シートがあり、その中に6種類程の

鳥の切手も入っていたので、金を出したが、渡してくれない。この若い女性店員は英語が分らないらしく、要領を得ない、やっと伝票を書いてくれて、手指しで、あちらへ持って行けというので、現金取扱いのカウンターへ行き、金を払うと現金受領伝票をくれたので、また元のところへ戻って、これを差出すと、やっと現品を渡してくれた。矢張り国営販売のソ連だと思っただが、それにしても僅かの買物に随分面倒な手数料が掛かるものだった。但し飛行機の中での買物では、こんなことはなく、値段を聞いて金を出すと直ぐ品物を渡してくれたが。

飛行準備が出来て携持品検査、身体検査の門をくぐって、また女性運転の空港連絡バスで寒い思いをして機内へ帰り、ほっとすると、午後8時5分(日本時間2時5分)離陸してロンドンへ向った。相変わらず機は安定、エンジンの音が快調な飛行。11時20分、モスクーを立って既に3時間15分を経過しているが、未だ普通の飛行状態である。星がまばらに見え、月が冲天にかかり、下界は雪で真白な世界だった。更に10分程して、いよいよ下降態勢に入った。下を見ていると、時々電燈の輝いている市街地も現われるようになる。イギリス本土に入ったようだ。レモン色の外燈が縦横一直線に或は斜めに伸びる美しい下界が見え出すとロンドンだと直感した。このレモン外燈は、道路に沿うもので、道路以外は水色の一般外燈であることが分ったが、ネオンは殆んど見られなかった。11時53分(モスクー時間、日本時間では5時53分)ロンドンのヒースロー国際空港に着陸した。モスクーから3時間50分弱、東京から出国してから、16時半を要した。ここで再び時計を3時間遅らして、ロンドン時間の午後8時53分と直した。空港にとまったアエロフロートソ連航空機の円窓には、雨粒が、ぼつぼ

つ当たって、このシーズンには一箇月の半分が雨天だというロンドン入りにふさわしい情景だった。そして舗装路も雨に濡れていた。

・師走や雨の出迎へロンドン入り

・夢でなしロンドンに着く冬小雨

### ースリムブリッジへの道すがらー

いささか興奮気味の一夜をロンドンのブルームズベリーセンターホテルで、友田学兄と同室で過した27日朝は、モーニング・コール6時15分で行動が開始された。集合時間の8時にホテル玄関前の街路で温度を測ると15度、随分暖かい。ガイド兼通訳のトンプソン夫人(東京の女子大学出で、英人と結婚、ロンドン在住、夫君はオックスフォード大学の教育職、17才の娘がある)の話だと、今冬は暖いが、平均気温は6度、北方の方へ行くと4度低いということ、暖冬で幸運に恵まれた旅になるようであり難い。ちなみにロンドンには雨が多く寒いので1年のうち8ヶ月は暖房が要するという。

リーゼントパークの南端を通り、西方184キロのスリムブリッジの田舎へと貸切バスは進む。市街地の中で、小さい池がある樹林の小区域を通過する時に、カワガラスに似たような鳥が見えたという声が車内にあったが、これはクロウタドリの見間違いと思う。嘴が黄色く、体の黒っぽいツグミ類の仲間である。郊外に出ると、芝生や緑の牧草地にカモメ類が降りているのも珍しかった。ロンドン市街を既に23キロも離れたが、左へ曲る通路を少し行くと、昨夜着いたヒースロー空港だという。牧野には牛や羊の群が見える。左側遙かに石造りの建造物の一廊が見えるようになると、有名なウインザー城で、観光客の訪れる所である。また牧草地の上をヨーロッパハシボソカラスが6羽飛んでいる。牧草地、麦畑、荒地のナラ林、時にはカンバの小

木が、イギリスの高速道路即ちモーターウェイを走る車窓から絶えず見えたり去ったりする。また牧草地にカモメ類やガン類が降りているのは、日本では見られない光景で、さすが鳥獣保護の先進国ならばこそで、鳥獣と人間とが一緒に仲良く住んでいるのは、日本では見られない風景だった。

以前に白鳥のことを書いてあった洋書に、イギリスでは牧草地に白鳥がやって来て、牛の何日分かの草を食ってしまって、農民が苦い顔をしているということを読んだことがある。このことは日本の白鳥渡来状況しか知らない者には、白鳥の食物は植物質のものだから、そういうこともあろうと想像はしながらも、完全には理解が出来なかった。然し眼のあたりに、牧場にガン類がいるのを見て、白鳥もそうかと理解出来たのは楽しかった。そして、この様な場合には、現在のわが国では、未だ人が大切か鳥や獣が大切かと力んで、おごれる人間の優越性を誇り、鳥獣を抹殺してしまう。そして知的レベルの低さ、教養の浅薄さを曝露して、人間だけが地球に住めるものと竹槍戦法にも似た愚さを表わす。公害病に苦しみ、環境汚染に悩まされながら、未だに眼を覚まし切らぬ日本人が多いのは情なく思った。鳥獣が安全に住める環境こそ、人間も公害の憂なく、人命の保全が確証されることを早く自覚して貰いたいと念じた。走り行く車の右手、道路近くに砂利を採取した跡が自然に池となった所に、キンクロハジロの数十羽の群が見られた。キンクロハジロは、日本では北海道で繁殖するものがあるが、本州以南では冬鳥だが、イギリスでは内部ロンドンでも繁殖し、郊外でも沢山繁殖している鳥である。携待の英国鳥類保護協会イギリス鳥類案内(1975)の図鑑を見ると、今まで見られたカモメ類は、カモメ、ユリカモメ、セグロカモメであった。この図鑑は、この度携行の唯一の図鑑で、出発前に

は荷物にならぬように一冊だけ持って行くことに決めたが、さてどれを持って行こうかと随分迷った。考えた末に、どうせ短期間のことではあるし、且つ冬期だけのことであり、それにグループ旅行なので、ゆっくり探鳥時間もないので、どうせ眼につくものは普通の鳥に過ぎぬだろうと思って、これ一冊だけを持って来たのだ。この本には最も普通のイギリスの鳥 218 種の図と簡単な説明がある簡便な図鑑である。尚本書にはイギリス(大ブリテン及びアイルランド)で記録された 485 種のチェック・リストもっている。更に進行しているうちに、電線にホシムクドリの群が休んでいた。

トンプソン夫人は、テムズ川やこれに沿う地域には、スワンがいて、特にロンドン・シターでは 1 年 1 回白鳥にシルシをつける式が今もあると説明してくれた時には、このことも私には今日の一つの収穫となった。

### テムズ川のコブハクチョウ

ここでコブハクチョウのことについて、シルシ付けを中心に少し述べておきたい。テムズ川付近のコブハクチョウは、遠い昔、ローマが英国を征服、占領の時代、既に飼養されていて、農夫等も自己所有のものに符号をつけていた。現在も行われているコブハクチョウの印付けの最初は、1230年に、ある修道小院の院長が、白鳥へシルシをつけたことであった。古く、王室によっても白鳥の職員がおかれたりして保護され、白鳥法という法で守られたり、王様にも飼養され、貴族は身分の表徴として飼養したりもしていた。16世紀のウィサム法令では、流水の中へ有毒物を投げる事が禁止され、また営巣している川の40フィート以内では、植物を攪乱することも許されなかった。18世紀には、シルシ付けする習慣は漸次すたれて、今は敬けんな二つのグループたちによって守られて

いるだけである。この今でもテムズ川で白鳥を所有し続けている2グループは、1472年に王権から白鳥マークを受けたものである。シルシは、主として上嘴につけられた。現在、テムズ川の総べてのコブハクチョウへ、マークをつけることと、所有権を確立するには、4日間を要するという。捕えられて、仔どもの白鳥は両親のマークに従って、シルシがつけられ、そして若い白鳥の翼は、餘り遠くへ飛ぶことがないように翼の先端が切られる。

白鳥上げ式は、7月の第3週の月曜日の午前11時にブラックフライアーズの寺院の踏み段で行われ、女王の白鳥管理人と二つのグループが出席し、女王の一行も華やかな小さいパーセントの先頭に立たれるという。王室白鳥管理人は、王室白鳥について、年4回チエンバレン卿へ報告し、また白鳥上げ週の後で、女王へ特別の報告することになっている。1956年には、1311羽が数えられたが、1972年には約700羽が、テムズ川にいて、そして90羽の仔白鳥が上げられた。過半数の女王の白鳥と二つのグループの間に分けられた。これらのコブハクチョウは、砂利採取跡地のくぼみの隠れ場所で営巣し、冬にはテムズ川へ帰る。激しい寒さが襲来すると、川は凍結して、白鳥たちは食物が採れず、餓死するようになる。この様な時には、テムズ川の王室の白鳥は、パンで養われる為に、王室白鳥係員や二つの敬けんなグループたちによって移動され、そんな危険から保護される。また氷の中に穴が開かれることもある。……

車は一路スリムブリッジへ快走を続けている。牧草地にミヤマガラスが一羽、ヨーロッパハシボソガラス10羽程と一緒にいた。ミヤマガラスは、冬鳥として日本特に九州北部の農耕地に渡来するカラス類だが、見るのは初めてであった。但し日本へ来るものとは、亜種が違うもの

である。イギリスのものは、嘴の付根から嘴の真中程まで白っぽいのがよく目立つ。イギリスでは、森の上をよく巡回するようで、生息場所は集団営巣のための高い樹木がある農地の地域で、イギリス全土にわたる留鳥である。窓外を眺めていたメンバーが、道路ばたでキジの死体を見たというので、例の携行の図鑑のキジを示すとキジに間違なかったという返事。イギリスのキジは、日本のものと同種だが、もともとイギリスには野生種はいなくて、移入されたものが、繁殖野生化したようだ。900年以前から、キジの色々な亜種が移入されたようで、1785年からは、東部中国よりの亜種と他の亜種が移入され、現在ブリテンとアイルランドを通じて、林地や植生密生地を生息地として繁殖している。10時過ぎに自動車サービス地で20分程休憩となったので、用便後食堂に入り、セルフサービスのコーヒーを一杯飲み、売店をのぞくと、本や雑誌などを売っていたので、イギリス及びヨーロッパの樹木と灌木の写真図鑑を買った。こんな本が、こんな所に売られていることは、日本では考えられないことであった。また小雨が、ちょっと降り出した。頭、首と尻部が黒く、その他は白い色の牛が悠々と草を食べている。牧草地の中に尾端に黒帯のあるカモメ類を見たが、ミツユビカモメの幼鳥だろうか。やがて車は、モーターウェイから左折して脇道に入った。いよいよスリムブリッジも近い。スリムブリッジ教会区の尖頭のある教会堂の前を通過、小さい川(セバン川からグロスターへ行く運河)を渡り、茶色の牛や白黒の牛のいる放牧地を過ぎると、11時10分、スリムブリッジ水禽協会に着いた。途中の休憩を含んで、ロンドンより184キロ、3時間近い道程だった。駐車場には、車が40台程駐車していて訪れる人も多い様である。